

膵がんに対する がんペプチドワクチン療法の 第Ⅰ/Ⅱ相臨床試験を行いました

以下は平成21年当時、臨床研究を行っていた際に使用したポスターの内容です

膵がんは、発見されたときには手術できないと宣告されることが多く、手術できても再発の可能性が高い、悪性度の強い腫瘍です。この膵がんに対して、現在標準治療薬は塩酸ゲムシタビンで、第二選択薬としてTS-1が一般臨床の現場で使用されています。これら二剤はいずれも膵がんに対して保険適応となっています。しかし、これらの治療も効果が少なかったり、副作用がみられたりするために治療の継続が困難となっている方が大勢いると推測されます。

今回私どもが行う研究は、東京大学医科学研究所との共同研究であり、膵がんの細胞に発現するペプチドを用いたがんペプチドワクチン療法です。

正式な名称は「標準療法不応、進行・再発膵癌に対する新規腫瘍抗原 KIF20A由来A2402拘束性エピトープペプチドを用いたペプチドワクチン療法:第Ⅰ/Ⅱ相臨床試験」です。

ワクチン投与により活性化された細胞障害性Tリンパ球ががん細胞を直接攻撃するもので、一般的な「活性化リンパ球療法」などとは異なります。

今回の研究の主な目的は、ワクチンの安全性を確認し、標準投与量を決定すること(第Ⅰ相試験)です。有害事象(副作用)がみられるのはどのくらいの量のワクチンを投与した時なのか、その副作用の度合いはどうかなどを調査します。ただ、安全性が確認できれば、投与量を決定し、その量で次の段階の試験(第Ⅱ相試験)に入ります。

責任者 副院長 浅原新吾



副院長

浅原 新吾

第252回
がんの個性を探れ ～がんワクチン 研究最前線～

2009年4月4日放送 **ZERO**

放送内容 めぐみの一歩 ZEROブレイク



「がん」は人によって多様。その“個性”を探り、それに応じた新たな治療法の研究が注目を集めている。個性の手がかりが「ペプチド」。がん特有な遺伝子を作るたんぱく質の一部で、東京大学医科学研究所のチームは1000人を超える患者の細胞の遺伝子をすべて分析。がん特有のペプチドを100種類以上も同定することに成功した。そのペプチドを利用したのが「ワクチン療法」ワクチンを接種して「キラーT細胞」と呼ばれるリンパ球の一種を体の中で活性化させ、がん細胞を攻撃し増殖を抑えるというもの。